

義太夫雜誌

太 棹

第六拾八號



東京 太 棹 社 發 行

八

第二回 東都素義名流大會

申込締切迫る

日時—九月十四、十五兩日〔正午開演〕……會場—淺草雷門 並木俱樂部
會費—金八圓(他一切不要)……語り時間—三十分……出演順—抽籤茶話
會(九月九日午後六時より並木俱樂部に於て)……申込締切—九月八日

いよく、初秋の義太夫絶好の季節と相成りました。本社主催第二回東都素義名流大會開催の豫告を致しました處、早速多數御申込みを賜り、本社の光榮これに過ぐるものはございません。尙御申込締切期日も切迫致しましたので、この際微力なる本社御後援の意味に於て早速御出演申込み下さいませう、重ねて御願ひ申し上げます。(茶話會を九日に決定しましたので申込切は八日に延期致しました)

東都素義名流大會は、各師匠御連中諸家が一堂に會されて、愉快に明らかな氣分を以て各自得意の十八番物を所演され、一日を楽しくお遊ばされる事を目的として企てました大會で、聴衆はもとより、出演諸家よりも、その第一回開會の際には、望外の御好評を賜りましたもので、今回も更に一層の努力を以て、着々準備してゐる次第でございます。それに、本社獨特の方法を以て左の企劃を任り、より一層出演諸家のお氣に入るやう努めをります。

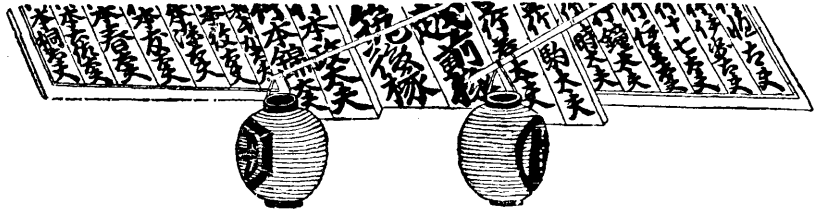
抽籤茶話會 九月九日午後六時より雷門並木俱樂部廣間に於て、御出演順抽籤を兼ね、大會直前の親睦を計る意味に於て、茶話會を開催と決定。當夜は何卒御自身お出向の上、抽籤遊ばされ諸家と一層の親睦を計られる事を希望いたします。

第二回東都素義名流大會記念號發行 第一回開催後、直ちに發行致しました記念號が殊の外なる好評を以て迎へられましたので、後日のよき記念たらしむべく、「太棹」來月號は全誌面を擧げて、その記念號を發行。全出演諸家の隨筆、感想を掲載し、大會當日の盛況一目瞭然たらしむるやう任りますので、御出演の外に後日のよき記念帖たらしむるやう存じます。

右何卒お含みの上、今秋は各大會に御出演御多忙の事とは存じ上げますが、秋季東都義太夫界の劈頭を承る東都素義名流大會に奮つて御參加御申込みの程、重ねて御願ひ申し上げます。

小石川區音羽町一ノ一四

主 催 太 棹 社



(行發回一月每) **棹太** (日一卅月八年十和昭)

◆◆◆ 號八拾六第 ◆◆◆

◇義太夫は世界に

類のない立派な音曲……………薄田斬雲…(三)

◇ラヂオ漫評……………金丸…(五)

◇一人一話……………(七)

—寺岡三幸 松本朝章 宮本武藏 松尾湊—

◇繪本太功記 十段目解説……………(八)

◇餘舞語吐……………(一〇)

◇大東京素義聯盟審査會に就ての聲明書……………竹本都太夫…(一一)

◇質疑應答……………(一二)

◇太棹社彙報……………(一三)

◇各地通信……………豊澤猿三郎・清水捨十郎
桐竹彌作・若水…(一六)

◇編輯後記……………芳河士記…(一七)

義太夫は世界に類のない立派な音楽

薄田 斬雲

(一)

私が、先年、日本人として世界の音楽界に大なる貢献をなせる、理學博士田中正平先生を訪問して、半日音楽談を聞いた事がある。今では、どれ丈けが、田中先生の談でどれ丈けが自分の考へであるか、はつきりしなくなつたが、以下述ぶる處は、田中先生を訪問した事を機縁として得た私の音楽智識である。當節の音楽者と言はるゝ人達は音楽の原理を説くに急にして、日本在來の諸種の音楽の世界的價值を詳述したものは少ないのは甚だ遺憾である。其の點田中先生の音楽談は私に一道の曙光を與へたものとして大切な教示であつたと思ふ。

(二)

私は、先づ、田中先生に向つて、露骨に低級な質問を出して、「浪花ぶしは音楽なりや」といふ事から切り出したのである。そして、日本には、音楽といふべきものはない、精々が音

曲と言はれて、音楽の水平線に達するものは皆無であるといふ、西洋音楽者の主張の是非を問ふたのである。

そんな低い處から質問して行つたのであるから、話は大變俚耳に入りよく展開された。

初め、西洋の「ミュージック」といふ語を何んと譯すべきかに就いて考へた末、之を音楽とした。音楽と音曲の區別などあるべき筈のものでない。最初に之を音曲と譯したら今頃どんな事になつて居るだらう、日本の三味線樂、浪花ぶし、琵琶が皆な音曲であり、西洋ものと同様立派に水平線上の音楽であるべき道理である。

西洋かぶれして、日本には音楽といふべきものがないなどいふ愚かしい事は止めるがよい。音楽學校を出たばかりの娘さんが、ベートーベンだ、ワグネルだと、あの拙い聲で、拙い手前きでピアノ、オルガン、バイオリンをだらしなく吹弾したのでは、それこそワグネル泣かせといふやつで、ピフテキは上等な料理でも、荒川放水路の堤のピフテキは食へぬと同じ事だ、迎も聴かれたものでない。或る横好き者が、太閤

記十段目を一段語つたら、坐客あてられて誰れ一人賞めて呉れ手がなく、手を拍つて呉れるものもなかつた。すると、料亭の女將之を見かねて「太十はようございますな」と言つたので、一坐どつと洪笑したといふ話がある。語りぶりは拙いが、出し物丈けはよいといふ賞め言葉は、今日の我が洋楽連中に當てはまるのだ。

(三)

世間では、又、義太夫は音楽でなく、三味線は楽器でない様な事をいふ、とんつきがある。赤茶けた髪で碧色の目でなければ人間でないと考へるやうなもので、洋装をすれば皆な淑女となると、本牧へ行けば、夜の淑女だらけといふ事になるだらう。鼻持のならぬといふは當節上野あたりをうろつく馬鹿女學生だ。あんなのが、成長すると、外國のスパイにおもちやにされて醜を新聞紙上に晒す化物だ。世間の親たるもの、自分の目が黒い處を鏡と相談するがよい。

(四)

國民性、國風といふ事を考へないやうでは、風上には立てない。櫻は西洋にないから花でないなど、は誰れも言はない。日本の國民性國風が、義太夫といふものを産み出し、三味線といふ樂器を作つた。鶴の嘴や象の鼻が長いたつて、切つたら困る。蛇に足がなくとも不自由はないのだ。西洋の物

は何んでもえらいと考へたのは、明治十年代の鹿鳴館繁昌といふ國辱時代の醜體だ。あの儘で進んだら、今頃は日本といふ國は世界地圖から削られて居た事であらう。

義太夫といふのは、音楽のあらゆる要素を網羅したものであつて、是こそは世界一の多趣多様感興の深い音楽であるぞよと御宜托があつて然るべき筈である。昨今の三味線の撥の牙えを能く聽いて見るがよい。ヴィオリンを日本人が三味線位に弾きこなしした例がたつた一人でもあるか。歐洲へ行つて本場の彈奏を聽いて歸つた耳で聽くと、日本人の洋樂の拙さ加減が餘りにも目に付くといふ。田舎の女は、どんなに化粧しても田舎臭い、江戸辯を使つても、土臭いと言はれる如く、日本人の洋樂は田舎臭いのである。西洋婦人が日本服を着た姿がおかしいと同じ様に、日本人の洋樂がおかしいのである。

所詮、音楽は國民性から来る。日本人には日本樂があり、西洋人には西洋樂がある。

「私は音楽を聴く耳を二様に持つて居ます」と田中正平先生は言つた。つまり、日本音楽を聴く耳と、西洋音楽を聴く耳と、二様に聴き分けるといふのである。

經濟價值のある文明の利器は、カンテラから直ちにランプに移り、ランプから一足飛びに電燈に移る事に何んの苦情もないが、經濟價值のない趣味藝術上の問題は、然うはいかぬ。可しや、西洋音楽は優つて居るとしても、其の興味を知

るには一足飛びに行かぬ。況んや、其の本質を異にした東西兩音楽に於ておや。

今それ、西洋音楽は、其の組織が複雑で、其の演出方法たる調子節廻しは、單純である。日本の音楽は、組織は單純で、其の調子節廻しは甚だしく細かく複雑である。故に西洋音楽は皆な譜を作るが、日本の音楽は譜を現せない程複雑である。假りに譜を作つた處で、之を諍ふ人の調子が同じものにはならない。日本音楽は南畫の如く、一線一劃が生きて動く處に生命がある。此の味は東洋趣味、日本趣味から來る。ガブ／＼コーヒーを飲むのと、ゆつくり玉露を味うのとの差異である。日本の島國、變化多き山川自然の情景が、日本人の頭腦を作り、日本の音楽藝術を産む。此の國土に即した人と藝とを、直ちに入れ替へが出来るものでない。木へ竹を接ぐの愚は皆様已に承知の筈である。

(五)

田中正平先生が、義太夫を禮讀する趣旨を案するに、是は日本に於ける最も組織の複雑な音楽であるといふ點から來るものらしい。義太夫を語るといふが、單に語るのではない。一ツの物語りを音楽にした處から語りものと言はれたので、寄席の講釋の讀み物とは意味が違ふ。川中島を讀む、玉藻前を讀むと言つたのは、唯拍子を取つて文章を其の儘讀んだに過ぎぬが、義太夫の語り物は全然音楽的に演出するのである。

抒情、叙景、叙事、對話を凡て含み、之を夫れ／＼音楽的に演出したのが、義太夫である。故に義太夫は他の音楽の要素を全部取入れて、而かも天衣無縫たらしめた。抒情の高潮に達した處は、さわりとなつて絶妙な節廻しを作り、長たらしい叙事の處は、其の事柄に應じて、或は軽く或は強く、或は手取り早く輕過して了ふ工夫も好く出來て居る、と直く劇的な對話の場面を作つて應答の間に其の人物の性格を見せる丈けのせりふ廻しが、巧みに使ひ分けられる。其れが爲に、單調に陥る事がなく、變化自在應接に暇なく、聽者を飽かしめないものである、長唄、常盤津、清元の變化の乏しいのに比して義太夫は頗る變化に富んだ音楽である。是れ程重寶に出來たものを、音楽でないなど、考へる頭腦はどうかして居る。

(六)

肉食をする西洋人の粗野な趣味から産れ出た、噪かしいガチャ／＼式の音楽を難有いものと思ひ込む愚劣さ加減は止めるがよい。又、ガラ／＼した味氣のない西洋人の肉聲を眞似る事も止めなくてはならぬ。日本人には日本人の聲の甘味がある。之を生かさんでは日本人を満足させる聲樂にはならない。生理的に東西人種の聲帶の構造の差があり、音聲に味の相違があるのに、此點を考へずに、持つて生れた聲迄西洋人の咽喉らしく使用するなどは餘りに無理な藝である。

(未完)

ラヂオ 浄曲漫評 金王

大阪女義 (八月十三日)

壺坂靈驗記 奥、御寺の段

豊竹園司 絃 豊澤小住

東京女義 (八月六日)

攝州合邦辻 合邦内の段

竹本素昇 絃 鶴澤三生

當夜は實に生憎な事で、據ない來客があつて、隣室に話をしながら聴いたので、充分に評など出來ぬ始末となつた。けれども、その來客との話の方も半分以上、上の空に自分の耳はラヂオの方へ行つてゐたのである。

この御兩人、どこかで一度聴いたやうな記憶もあるが、實は初めても同様で、先づ素昇氏の堂々たる聲量に驚き、尙ほ些の當て氣のない語り口を喜び、三生氏の拗きのシツカリしてゐるのに感服する。

茶漬でも手向けてやりや、のあと、母親が疾しやおそしと聞く間も、『おなつかしや、お

なつかしやと纏る娘のかほかたち』が近頃どうかすると『繕る娘のなりかたち』といふのを、本文通り顔形といつたのも嬉しい一つであつた。

合邦の『ヤイ畜生め』以下の長セリフ『どの頬げたてぬかした』から『覺悟せい、ぶち放す』あたりの力強さ、タレも此の位なら聽かれるナ、と來客と評判した。

それから『エ、さう吐かしやもう堪忍がと父が身構へ母親は、お、道理でござんす、腹の立つは尤もじゃが』の邊で、大抵の人はよく泣くのだが、あすこを泣かなかつたのも可いとおもつた。が、大體に於て、あの母親は若過ぎはしなかつたか、尤も玉手御前が十九やはたちといふ本文があれば、二十歳位で出來た娘なら、まだ母親も四十そこへはあらうけれど、人形からゆくと、少し老けた方だらうとおもはれる。

あゝ又た壺坂かと、元來、あまり好きでない此の淨るりのプロを見た時、實はウンザリした拙者だつた。が、いよ／＼スキツチを入れて奥の山の段であつたので、稍や救はれたとおもつた。つい此の間、東京の小土佐女史が、例の三つ違ひを聽かせたばかり、恰ど、これで丸一段になる譯である。

さて、團司嬢？の語り、語り出しなど、コロッと違つた人のやうに線が太くなり、十年前の團司君とは格別の相違である。元來が詞の巧い人、最初のほどはおさとの方が盲人でないかとおもはせたが、例の笑ひなどから、グツトさすがに盲人の澤市を現出した。

観音様へ來てから『知らずとつかは』でおさとが山を降りるまでの、二人の會話の巧さちよつと眞似人もない、とさへおもはせた。それに特に推賞すべきは、此人の泣きの巧さである。東西を通じて、此の人ほど泣く事の

巧い人は無いとおもふ。澤市の獨白から飛込
みまでの泣き、おさが氣も狂ふばかりの愁
嘆、おもはず吊り込まれて目がしらを熱くさ
せられた。

さらに、おさとのクドキの間でも、巧いな
ア、とおもはせた息つかひの研究を感じしめ
た處數ヶ所ある。觀世音の美妙の御聲も不思
議に神々しく、感服させた。段切りは小住の
絃と共に、驚喜する人形の動きを髣髴させ
た。

近頃では寧ろ珍らしい演じ物の、シカモ前に
打つて付けの語り物だつた。そして大體取り
立て、言ふ處もない無難な出来であつたと言
へやう。

二三ヶ所、紙二三枚抜いただけの全部を語
られたが、最初のざわ／＼いふ見物群衆の、あ
んまり待つたで寒むなつた、のあたり非常に

こゝろいき抄 墨亭

こゝに御披露申さうは、艶い優し
き淨瑠璃の、その名文句を讀み込ん
で、三筋にのぼすこゝろいき。

關取千兩幟

遅い歸りはたゞ女氣の

ひとりくよ／＼夜を明す

三十三所花の山

思ふ仲ならもとより覺悟

貧苦にせまれどなんのその

日吉丸稚櫻

末の末迄二人の無事を

祈る神さま佛さま

結構に聽いた。強いて難を言へば母親の調子
が少し若過ぎはしなかつたか、それから地合
の、ともすれば一言特に耳立つて下がる癖の
あるのを聽いた。

絃の清次郎さんは、相生太夫の合三味線か
とおもふが、奇麗な撥擲きて、この上るりな
どには結構な人かとおもふ。

艶妾女舞衣

切れてみたけどあきらめ憎い

今更かへらぬ事乍ら

生寫朝顔日記

露の干ぬ間の朝顔よりも

先きにしほれて泣き別れ

文樂古老 (八月十八日)

戀娘昔八丈

|| 鈴ヶ森の段 ||

豊竹駒太夫

絃 鶴澤清次郎

駒太夫さんは小富太夫から富太夫になり、

更らに大正三年に七代目駒太夫を襲いて、も
う二十年、明治十五年の生れだから年輩から
言つても文樂の古老で、今では別格といふ處
だらう。上るりは何でもよく調べて知つてゐ
る人といふ事である。

盲人であつて割合に、所謂メクラ聲を出さ
ぬ美音の持主、當夜の語り物「鈴ヶ森」などは

民事 刑事 商事

扶桑教權大政正
前判事

辯護士 飛石久太郎

併號 かなめ

特許事件
迅速懇切
に取扱ふ

東京市本區東五軒町五四
市電東五軒町停留所隣
電話牛込四五七四七番

一人一話

★ 寺岡 三幸

この夏はいや猛稽古をしたものだと、自分乍ら面白かった。房州の和田倉と千倉へその間を縫つて朝草君と東太夫の同行三人で避暑に出掛けた。報知新聞社の重役久間氏の別荘で語つたが、主人は「忠六」これには驚いた。平常貸席なんかで語らない人に、矢張り恐るべき人がゐると、つくづく敬服してしまつた。

何しろ雨ばかりで、梅雨のぶり返しみたいな涼しさ、深雪の川止めぢやないが、雨攻めで、浴衣の重ね着に恐れをなして歸つたらこの暑さだ。

★ 松本 朝章

八月十二日、我々同業の組合の夏期旅行で、箱根へ出掛けた。

日歸りの旅行では、てんで行く處がないので、もう箱根はうんざりしてゐるのだが又候出掛けていつたわけだ。

なにしろ日歸りの旅なんてものは全く味氣ないもので、一の湯で一日食べては寝、起きては食べといふわけで、なにをしに行つたのかとんとわけがわからずしまひで、それでもまあ同業との親睦を計つて歸つてきた。

玉井松樂氏も見えてゐて、一泪を推められたが、箱根も暑いし、そこへ逃げ歸つてきた。

★ 宮本 武藏

先達て所用で大阪の歸りに伊勢に立ち寄つた。

二見ヶ浦で寫眞を取つたが實に二見ヶ浦の風景といひ、人物といひ、ハツキリしてゐる。

團體だのなんか来て、始終撮影してゐるので、土地の寫眞師の技術は進歩してゐるよく名所で寫す寫眞は、妙なものがあがるが、これには感心した。

昨年は下呂から大阪へ出て歸途高岡、伏木、山中、山城などの温泉めぐりをして面白かつたが、中にも山城は實にいい處で、今でも懐しく思ひ出してゐる。夏はなんといつても旅がいい。

★ 松尾 湊

草津へ行つて來ました。先きに湊太夫師夫妻が出掛かれてゐて、猿三郎師も行つてゐましたが、これは行き違ひで逢へませんでした。

草津の義太夫隆盛には驚きました。

大阪からも大勢師匠連も來てゐますし、土地の師匠もをり、聞きしに勝る盛んな土地に、びつくりしました。

向ふで大勢集つて、一夕審查會を開き、各自得意のものを熱演しましたが、私は優勝といふ、天狗のついた繪ピラを買ひました。午前中は古いもの、練習、午後は「太十」の稽古と、随分愉快に過してきました。

繪本太功記 解題

初演 寛政十一年七月 豊竹座。

作者 近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒。

由来 岡田玉山著「繪本太功記」(寛政九年——享和二年)なる讀本に依り、武智光秀

の主君小田春長に對する弑逆事件を中心として、脚色せるもの。發端安土春長館蘇鐵の諫言より、小栗晒光秀最期迄を、十三日に分けて作つた十三冊物。この十冊目、尼ヶ崎の段の趣向は、近松門左衛門作「用明天皇職人鑑」(寛永二年十一月竹本座)の第二段目、佐渡の兵藤太内の段に於ける、母の身代りの趣向を持つてきて、譏案せるもの。

梗概 武智光秀は主君小田春長に、妙國寺の蘇鐵の諫言を爲した事、寵臣森蘭丸と争つた事などから、勘氣を受けて領地を召し上げられ、遂に反逆心を起し、本能寺を夜討にして、主君及び蘭丸は討死する。高松城を水攻めにしてゐる眞柴久吉は、安國寺惠瓊、城將清水宗治妹玉露の奔走で和議を整へ、兵を光秀征伐に轉廻。光秀の母臯月は反逆人の子を生んだ悲しさに廻國修行に出る。光秀は今となつては主君を弑した事を後悔して、切腹し

ようとするのを、四方田但馬守に陳止されて一子十次郎と共に久吉の軍を迎へる。一方、尼ヶ崎の臯月の閑居を、光秀の妻操と初菊が訪れ、續いて十次郎が出陣の許しを得る爲めに、これも祖母の閑居を訪ひ、許嫁の初菊と盡きぬ名残を惜しんで初陣に出發。旅僧に身をやつた眞柴久吉が、一夜の宿を求めて様子を伺ふ。この後をつけた光秀が襖越しに刺した竹槍に、母臯月が覺悟の諫死。久吉と光秀は再會を約して別れたが、後山崎の合戦に光秀は大敗北となり、小栗晒に逃れて、土人の竹槍に一命を果して終る。

語場 十段目を初演したのは初代豊竹麗太夫。大阪船場の人で、通稱鍋宗大盡と世に持て囃された全くの旦那衆で、若くして音曲に堪能の聞え高く、一中節深草の節付けは、この人であると傳へられてゐる。初代豊竹駒太夫の門弟で、天性の美音、表の三本で上がつかへず、裏の三分で下がつかへず、ギンの音は、一二三共に、どのツボからでもにじつた高い所から出して、上品この上なく、張り強く押し強く、よく人情を語り抜き、當時一人も敵する者がなかつたといふ。豊竹座が維持困難となつて、櫓が傾かうとした時、芝居が

潰れるなら、俺が出てやらうといつて、出勤した斯道大天狗の元祖、その辭藝名は鞍馬山の下の麓太夫だと謙遜して義太夫界に投じた人。この「太十」や「蝶花形」の小阪部館等は、今に斯道では麓場と稱して、極めて重いものとされてゐる。文政五年五月、九十三歳で歿した。義太夫節中興の祖である。

餘話 當時の事として無論、御簾内で語つてゐたが、麓太夫の床の側に茶棚を置き、銀瓶に白湯を沸し、玉露の茶を淹れて、羊羹を食べ乍ら、語る片手で茶を呑み、光秀の出の前迄は胡坐をかいて語り、それからやつと正坐して語つて、しかも人情溢るゝばかりであつたといふ。後年、五世鶴澤清七、二世豊澤團平の如き名匠が出て、いろ／＼崩れた節を訂正補修したが、この麓場ばかりは、一と撥も手を下し得なかつたといふ。又、新淨瑠璃本讀みの時は、必ず女房に傍聽させて一心に聞き入り、眞に迫つて泣く時はすぐに納つたが、さうでない時は何度でも作者に書き直させ、「太十」は三度目にやうやく女房が泣き出したので、作者も麓太夫も大喜びで、早速上場すると、その噂三都に高く、古今比類なき大當りを取つた。

繪本太功記 十段目切

★ 一間へ入にけり 畢月は十次郎き、初菊も今宵祝言の盃して出陣せよといひ、操はその用意を初菊は夫に成るべき十次郎が、初陣の鏝の役をする爲にこの三人がそれく、奥の一間へ入つて、舞臺は十次郎獨りが残り、今日の初陣に討死し覺悟極めたこの身體、お暇乞ひに委つたのを、御存知もない様子は、なんごしたものと、涙を呑み込んで思ひに沈んでゐる件から、此の切は始まる。

★ 残る苔の花一つ 十次郎のまだうら若い姿を、苔の花を形容したもので、一説に、この苔は椿であるといふ。

★ 水上かれし風情 その苔が水を吸ひ上げかねてゐるといふ、思ひ餘つた様子。椿は水を吸はない花なので、この苔を椿と解釋するのは妥當です。殊に後の初菊の口説きの件に、玉椿といふ文句が使つてあるので、十次郎を白い椿、初菊を赤い椿と形容した作者の働きと解釋する事が出来ます。

★ 思案投首しほるゝばかり 思ひ案じて、頭を傾けて考へ感ふ様子を、前からの花の形容についで、恰で花が萎れるやうだといふ意。

★ 是今生の暇乞 これがこの世での最期。

★ 此身の願ひ叶ふたれば 十次郎が祖母の畢月に願つた出陣が、許されたのであるから。

▽この件の十次郎の詞は、思ひ餘つた十次郎の獨り言で、隣りの誰かに聞かせてゐるのではありません。だから、初菊が出てくるミ、ハツミするのです。

★ 二世も三世も女夫 二世は夫婦の契りをいふ。それ以上に、前世も、現世も、來世も夫婦たごいふ極めて情の深い意。

★ 一間へ入にけり、残る苔の花一つ、水上かれし風情にて思案、投首しほるゝばかり漸、涙押とどめ、母様にもば、様にも、是今生の暇乞、此身の願ひ叶ふたれば、思ひ置事更になし、十八年が其間御恩は海山かへがたし、討死するは武士の、習ひと思し召し分けられて、先立不孝は赦してたべ、二つには又初菊殿、まだ祝言の盃を、せぬが互ひの身の仕合せ、わしが事は思ひ切、他家へ縁付して下され、討死と聞くならば、さこそ歎かんと不便やと、孝と戀との思ひの海隔つ一間に初菊が、立聞涙轉び出わつと計に、泣出せば、はつと驚き口に手を當、ア、コレ聲が高い初菊殿、扱は様子を、アイ残らず聞てをりました、夫の討死遊ばすを妻がしらいで何とせう、二世も三世も女夫じゃと思ふてゐるに情ない、盃せぬが仕合せとは、餘り聞えぬ光義様、祝言さへも濟ぬ内討死とは曲がない、わしや何ぼうでも殺しはせぬ、思ひ留つて給はれと縋り歎けば、ア、コレこなたも武士の娘じやないか、十次郎が討死は豫ての覺悟、ば、様に泣き顔見せ。もし悟られて

餘舞語吐

この秋の東都義太夫界は將に素義黃金時代、一面非常時とも見られるものがある。

一體に眠りこけてゐたやうな義太夫界が、近來、頓に活氣を呈して來た事は、實に喜ばしい現象でこの勢ひに乗じて、往年の義太夫道華かやなりし頃を現出したいと思ふのは、單に餘舞語吐子の希望ばかりでもあるまい。

しかし乍ら一面、樂しかるべき道樂の斯界に、いふにいへない不愉快な気分のある事も事實である。これを何にとかなす。即ち、陰險なる泥試合である。

やれ、誰それは何の會の相談役になつたが、俺の所には持つて來

ない。

やれ、何の會に俺を出演させないのは、ケシカラン。

やれ、誰それが會を始めやがつた。あんな會は潰しちまへ。等等等。

由來旦那藝の尤なるものは義太夫とされてゐる。

「何處の旦那は義太夫をお語りになる」

それが一つの、出入りの者にも床しいものとされてゐたのである事實又、決してそんなのばかりはゐないが、とに角近頃、誰がどうした、彼がからしたといふ事が、實に小五月蠅く聞えてくる。

いやな空氣である。

旦那藝の義太夫道には、絶滅させたい、いやな空氣である。

實際のところ、誰が何會の相談役にならうと、又なるまいと、一

體どうだといふのですか。

誰が何會の出演に選ばれたからといつて、どこがどうだといふのですか。

これぢやアまるで道樂が道樂にならない。寧ろそんな事を苦に病んで、青くなつたり赤くなつたりしてゐるんぢやア、義太夫も道樂ぢやない。道苦です。

審査會に出演して、自分の思つたより點が悪いからといつて、あとでブツ／＼いふ。

もと／＼審査會に出る以上は、その審査員に對して、信頼を持つから出るので、あとで愚圖／＼いふ位なら、てんから出ないがよろしいのです。

出た以上は、成る程これが俺の點なのか。

よくつても悪くつてもさう思ふのが當り前です。

ところで、どんなものでせう？こゝいらで一つ氣分をさつぱりと直して、飽く迄愉快に、明朗な氣分で、本來の旦那様になつて、樂しみに義太夫を語られては。

少しばかり首を入れた新人が、「へえ、素養でえのは、こんなに始終なんかかんかいつてる所か」と、いやアな氣がして、折角の義太夫の稽古も止めになつてしまいます。

だから師匠連は、なるべくそうした問題に觸れないで、楽しくお稽古をなさる事。

素養の方々も、朗かに、「現れ出でたる、武智光秀ッ」とおやりになる事。

道樂、趣味——これをお忘れになつてはいけません。

と思ひますが。

大東京素義聯盟審査會に就ての聲明書

竹 本 都 太 夫

此の度寶藏寺天昇氏を會長として設立された大東京素義聯盟審査會に就て、私宛に左の如き匿名の投書が参りました。

それは「役員選定は玄素共に天昇氏、津賀太夫師及び貴殿の指圖に依る趣き拜承」とあり、「素義の部として顧問、相談役、理事、幹事等は如何なる御意向により裁斷相成候哉、小生も一役員に御指定被下候へ共、その點明確を缺」いてゐるので、その間の事情を聞きたいとあり、「又玄人の部としてイロハ順に非ざる分は之又如何なる額付を以て決定」したか、参考の爲に解答せよと申す投書で、「八月廿二日、日本橋馬喰町、愛義會同人」としてある匿名の封緘郵便であります。

右に就き殆ど同文のものを、太棹及び淨瑠璃時報社にも送つたから、その誌上で解答せよといふ大變勝手なもので、時報社では匿名の投書は没書にするとの事で、又私は時報は近來購讀を中止してをりますので、太棹の貴重な紙上を拜借して、右に對する解答を致します。

但し私は匿名の投書に答へる責任はありませんが、右文中私の「指圖に依る趣き拜承」とありますので、これは何等か私に悪意ある者の流言蜚語が、斯共に流布されてゐる事と存じますので、素玄共に東都義太夫關係者に一言聲明致す次第でございます。

私は天昇氏には御虫負になり、巴津天會にも出入りをさして戴いてをりますが、今回の大東京素義聯盟審査會には、單に審査員として捺印した以外、その設立その他に就ては一切相談に參與致してをりません。

天昇氏の趣意書の末文にも見られます通り、「創立誕生第一回は會長の感想に依り發會致し候」とあります如く、何等その設立發會には無關係であります。況して平常お世話になります素義の方々に対して、顧問、相談役、理事、幹事の裁斷はいふも更なり、同業の仲間に対して、どうして私が役員を選定なぞ致す資格がありませんか。

同會は誰方が素義の方が事務に携つてをられるやうに承つてをりますが、會長自身申さ

れてゐる通り、全然會長個人の感想に依つて發會され、準備された事と信じられます。

最後に一言、「愛義會同人」といはれる方に申上げますやうに文の内容から察しますと、素義の方のやうに見受けられます。義太夫が今日、國粹藝術とか、日本精神とか喧しく申されてをります時代に、悪意ある匿名の投書を以て、一藝人を相手取り、聲明書を出せのなんのと仰有るのは、紳士の行爲とは受け取り兼ねます。喧嘩ならば、昔から嫌ひな方ではなく、私は大阪が本場といはれる義太夫が好きで、これを生命と致してをりますもの、もとより生粹の江戸ッ子でございます。近頃法華の信者になりました、少し位の事は我慢してゴリガンは封じてをりますが、正面切つた喧嘩ならば、何時でもお相手致す所存でござ張りかなざいますか、陰險な態度を以て、一藝人を八んかて、眞綿に首は、ちと如何かと存ぜられます。

近頃よく義太夫界にも聲明書などいふものが流行してゐるやうでございますが、私は藝人は藝人らしく、いふ事を建て前と致してをりますので、政界のやうな小汚い事は申上げない事にしてをりますが、悪意ある投書に對して黙つてゐては、さも私に不正な事でもあるやうに思はれると存じましたので、右は愛義會同人様以外の義太夫關係者に烏滸がましくも聲明致しました次第でございます。

尙太棹紙上を拜借して掲載致す事は、天昇氏にも書簡を以て申上げておいた事を申し添えておきます。南無妙法蓮華經。

質疑 應答

◆各大學國文科などでは、盛んに近松物その他淨瑠璃院本が講義されてゐるやうですが、私達素義が舞臺でその淨瑠璃を所演してゐ乍ら、可成解り憎い事を、その儘解らずに語つてゐます。かといつて

研究者は勿論、字句の解釋も解つてからお語りになりたいと思はれるのは當然な事と存じます。ところで、では現在迄に義太夫の註釋本はあつたかと申しますと、殆ど皆無でした、いくら書店へお出掛けになつても、てんで無いのであります。例へ一二の書はありまして、極めて難解な古書であるとか、

要求を満すべく、義太夫註釋が本誌上に掲載される事になりました。何分限りある紙上故、毎號二頁づつ掲載し、先づ最も普及されてゐる「太十」を註釋する事になりました。右は某研究家の執筆に依るもので、本號以來遂次掲載し完結後一冊の解説書として本社より發刊し、何等かの方法によつて宣傳普及の一助たらしめたく存じてをります。右評釋の方法は、先づその淨瑠璃全段の解説を載せてそこに至る迄の略筋、及び大團圓迄を諒解する方法を取り、そのうちの中心の段、即ち「繪本太功記」ならば十段目、「菅原傳授手習鑑」ならば四段目の字句の解釋を、細大洩らさず註釋し、加ふるにその初演の太夫の藝風を記して、その風格を解説し、お語りになる時の参考とする等、從來他の企て及ばない註釋本にするつもりでをります。尙刊行書目は遂次發表。先づ

◆「伽羅先代萩」御殿の段の「跡ツン見送りて政岡が」のツンを入れないで彈く三味線彈きがあるが、あれは入れた方が正しきや否や御返答ありたし。(古富五光)

◇「御殿」の「跡ツン見送りて政岡が」及び「長局」の「跡ツン見送りて襖の影」及び「志度寺」の「跡ツン見送りて菅の谷が」などは全部、同じ節であつて、これはツンを入れるのが、風になつてをります。風といふのは、初演の太夫なり、或はそれを後年得意として語つて、この風の宣傳された太夫の特色をいふのでして、この節は俗に住太夫節といつて、古來よりツンを入れて語つてゐるもので、これを入れないでやるのは御勝手ですが、それでは義太夫の洗練された傳統、風格といふものは無くなつて浪花節と同じ事になります。住太夫といふ人は寶曆七年、歿、當時歌ふ事に流れた藝風を、語る事に戻した名人であります。

一字引をひくだけの氣力もありませんし、なにか註釋のついた本が欲しいと思ひますが、私共のやうに書店へ出掛けた事のない者は、どういふものがあるのかもさつぱり解りません。私共が普段語つてゐる義太夫の註釋本があつたらお教へ下さい。(喜雀生)

◇御尤な要求でございます。商賣人の方でも、この義太夫は口傳口傳で、たゞ師匠の口移しだけを勉強して、意味の解釋といふものは餘り問題にされてゐなかつたものですが、これからの新しい斯道研

せんので、偶然に本號より、その

「太十」を御愛讀御参考下さい。

東都五十義會の陣容更新

近來頓に活氣を呈し、今秋東都素義界は、將にその黄金時代を現出する勢ひにある秋、古い傳統と團結を以て誇る東都五十義會に於ては、頓にその陣容更新を企て、いよ／＼正式に副會長長勝田松雨氏が就任、會長鈴木松實氏は留任する事となつて、こゝに幾多の新しき計畫を發表する事となつた。

その第一には、相談役の増員を企て、先般來會員諸氏にその證衡を質し、左の廿一氏が決定する所となつた。(順序不同)

松尾武市、栗原千鶴、桑原美峰、伊藤松鶴、中道素鶴、竹内たもつ、片山つばあ、保々長平、三ツ木美登利、猪谷銀水、近江清華、白井清華、玉井松樂、小林和舟、岩田未成、高橋可遊、寺岡三幸、的野關路、和田春和、

小林隅斗、細川清の諸氏。
第二の改革には、その機關パシフレットたる東都素義公報が久しく休刊されてゐたのを、この九月初旬に復活第一號を續刊する事となり、體裁も從來のものとは改めて小形八頁の洒落た編輯振りで發刊する事となり、名實共に東都五十義會の堂々たる機關誌とすべく、編輯者は大童の奮闘振りをしてゐる。

然して第廿四回秋季大會はいよ／＼十月二十、一日の兩日日本橋俱樂部に於て開催する事となつたが、今回は從來の大關の上に、更に東都五十義會十傑なるものを設けて、大家連の出場を促す新方法を企て、東西各五人の十傑は、審査の結果、第一位から十位迄の人々に依つてこれを召め、番附面への發表は東

西各五人づゝを分立して、八人尚、會費は例によつて十圓、番附の下へ五人の大書をしようといふから、相當この十傑を目標して、大家連の出演が豫想さ義會事務所。

兜會秋季大會

兜會秋季大會は十月十三日、同會は早くもその準備行動に日本橋俱樂部と決定、今回は新着手し、秋の義太夫界はこの大會も多數加入された事として、會を加へてまたも非常な活氣を當日の盛大さは今から察せられ呈するものと見られてゐる。

佐藤和洲氏三回忌追善會

佐藤和洲氏が他界されて、三手向草(殿母太夫)酒屋(可回忌に相當する所から、その友松)辨上(長平)太十(奇聲)人方が集つて、九月六日午後四時より、入谷俱樂部に、追善義(たもつ)先代(沖)城木屋(阿太夫會を催す事となつた。當日松)鯉谷(福笑)絃(猿藏、燕は先着百名へ御供物を進呈する事となつてをり、さだめし盛況歌吉、隅六、勝風、廣助)(語を見る事であらう。

順不同)

◆ 竹本駒若師轉向せず

過日都新聞紙上に寫真入りで堂々と、竹本駒若師の浪花節入り轉向問題が掲載されて、斯界に噂の種を撒いたが、右は絶對の誤傳にて、駒若師は趣味として浪花節、常磐津等を樂しむ事はあるが、どうして子供の時から勉強した義太夫を今更ら捨て

る事が出来ませうかと、この評判を酷く氣にしてゐる。尙二三龍の絃にて相變らず淺草義太夫座に特別出演して、淺草の万才の大衆層に義太夫の宣傳を努力してゐる。

◆ 犬猫供養塔建立

おなじこの世に生を受け乍ら私等三味線を以て生活してゐる人々の爲に、命を絶たれた犬猫に對し、畜類解脱の本願を以て豊澤雷助、豊澤猿藏の兩師が発起人となり、犬猫供養塔建立の企てを起した。

これに賛助員として、豊澤猿之助、鶴澤司好、野澤語左衛門の諸師が加はり、大日本義太夫の因會も後援する事となり、着々として供養塔建立の企ては進歩してゐる。これは從來各流に於て企てられた試みであるが、時宜を得た事として好感を以て迎へられてゐる。

◆ 四代目豊竹君太夫師逝去

東都義太夫界の元老たる豊竹君太夫師は、先般來病臥中であ

つたが、七月三十一日午前九時十五分市ヶ谷の自宅に於て七十才を以て永眠した。同師は文久元年一月二十日、大阪心齋橋に於て生れ、十一才の時に先代豊竹駒太夫の門に入り、十九才にして竹本重太夫に師事、藝名を重の太夫と名乗り、同年師匠の上京に伴つて東上、後組太夫の門にも遊び、彦六座

中堅として重きを爲し、明治三十八年四月、四代目春太夫を襲名し、後東都に止まり、床本揮毫を以ては隨一の稱を與へられ晩年迄全國の愛好者より註文を受けてゐたが、舞臺生活は今は無き淨瑠璃研究會が最後の舞臺であつた。冥福を祈る次第である。

◆ 前島貴昇氏全快祝

往年、竹本播磨太夫の御連中の中にも藝巧者を以て知られた前島貴昇氏は、近來殆どその姿を見せなくなつたので、どうした事かと思はれたが、先年來神經痛にて引退されてゐたので、此の程、漸く歩行も自由となり、殆ど全快したので、七月二十七日夕同氏と親しい人々か集つてその經營されてゐる神樂坂美容院樓上に於て全快祝ひの淨瑠璃會が催された。

同夜は同氏經營の吉原、洲崎茅町の諸美容院より參じた多數の美容師が早くより詰め掛け、時ならぬ花を飾り、賑々敷い盛況であつた。忠四(蟻清、猿清)新口(都昇、都太夫)玉三(蝶花形、都太夫)合邦(貴昇、猿清)尙、蝶花形とは醫學博士岡田道一氏の俳名にて、同夜は開演以前、若い婦入連に對して淨瑠璃の解説普及を講演された。

源福太夫師の新作發表

竹本源福太夫師は、永年斯界に新作淨瑠璃を發表して、その都度好評を博してゐるが、今夏はまた「一響の軍刀後日の箱書、猛將小出少尉」の新作を發表した。

竹本都太夫後援會

九月七日午後六時半より、淺草雷門東橋亭に於て、竹本都太夫後援會が開催される事となつた。

右は東寶專屬の三笑亭可樂、蝶花樓馬樂の江戸前落語、笑の王國の人気者であり、一龍齋貞山の愛弟子一龍齋貞壽事、山野一郎の文藝講談を加へて、一夕

右は作詞藤井天海氏、作曲竹本源福太夫師で、これ亦斯界に一話題を提供した。發行所は大阪住吉區阿倍野筋二ノ七〇藤井天海堂。非賣品の限定出版である。

當座帖

- ▽仙臺八雲氏 都新聞社退職の同氏は、日本橋區茅場町一丁目に獨立、出版通信業を開始。
- ▽男加女會 九月四日淺草公園俱樂部に。
- ▽聲友會 九月十二、十三、十四日龜甲俱樂部に。
- ▽聲義會 九月十一、十二、十三日入谷俱樂部に。
- ▽東都素義名流大會 九月十四、十五兩日並木俱樂部に。
- ▽大東京素義聯盟審查會 九月廿一日より並木俱樂部に。
- ▽帝都素義聯合會 十月一日より三日間に變更、並木俱樂部。
- ▽東西素義合同審查會 十月五、六日報知講堂に。
- ▽兜會秋季大會 十月十三日に變更、日本橋俱樂部に。
- ▽淨曲振興會 十月十四日白山屋ホールに。
- ▽東都五十義會秋季大會 十月廿、廿一兩日、日本橋俱樂部。
- ▽小林隅斗氏(淺間溫泉) 塚保有曲氏(鎌倉) 栗田長壽氏(淺間) 寺岡三幸氏(房州和田倉) 松本朝章(同上) 寶藏寺天昇氏(淺間より箱根) 高橋可遊氏(葉山) 金井仙玉氏(淺間) 岩田未成氏、片山つばめ氏はいづれも郷里へ、各々避暑、
- ▽竹本染之助 上州老神溫泉に病後保養中。
- ▽豐澤會秋季大會 第廿六回を十月七日電氣俱樂部に開催。
- ▽豐澤廣助 稽古用レコード第四回發表、十種香「帳臺」まで懸十「全段」。
- ▽竹本巴津昇 淺間より箱根へ避暑。
- ▽淺草音女會 十月廿日復活開會。

草津

豊澤猿三郎

▽日清館樓上の催し△

三日、四日と日清館樓上で左記催をやりました。湊太夫夫妻、大阪の助三郎氏、往年の竹本朝駒さん等が見へ、會場は満員で有ました。四日は一年一度の丑湯で、草津でのお正月騒ぎで、客足を心配仕ましたが前日に勝る満員で、一行大元氣で有ました。今日輕井澤を廻つて歸京致します、今日あたり松尾湊氏が來湯される筈です。番組は、次の通りであります。

(三日) 太十(喜樂、光之助) 陣屋(千歳、猿三郎) 合邦(輝頭、吉季) 新口(秋月、猿三郎) (四日) 先代(喜樂、光之助) 菅四(千歳、猿三郎) 岸姫(秋月、猿三郎) すしや(輝頭、吉季) 逆櫓(一鳳、猿三郎)

大阪

桐竹彌作

▽素義都聲會審査會△

本會はその第十九回審査會を七月十日正午より上七軒の北野俱樂部に於て開催しました。その成績表は左の通りであります。二百點を滿點としてやつてをりますが、なしろ今度は案内状が出てから間もなく例の水害の爲に延期しなくてはなるまいといはれたのを、押し切つてやつた仕事と、いつも程の活氣はありませんでした。出演諸氏の熱演は涙ぐましいものがありました。審査員は小西い京、宅間濱戸の兩君でして左の通りの成績でした。

(大關) 太十(一七八、錦昇) 引窓(一七四清水) (張出大關) 谷三(一七三、タツミ) (別格) 玉三(九州、南光) (關脇) 市若(一六三よふく) 彌作(一五三、登一(小結) 忠四(一五三、茶木) 宿屋(一五〇、甲良齋) (前頭) (一五〇乙、田雀) 揚屋(一四九、義鳥) 講七(一四〇、鶴峰) 伏見里(一三八、瀬戸) 谷三(一三三、藤司) 椎の木(一二五、紫幸) 玉三(一一五、紫雀) 引窓(一一二、喜藤) 香掛(一一〇、都若) 玉三(一〇九、鹿人) 儀作(一〇八、治若) 御殿(九〇、紫登) 新口(八八

一昇) 野崎(八七、染人) 又助(八五、義長) 忠六(七九、十六)

▽第十八回土佐會△

六月二十一、二の兩日大阪南地演舞場にて開催。講評員は例の通り、竹本土佐太夫、小西い京兩君、二日目は私不參にて番組は不明ですが、初日だけのお知らせします。

飯碗(眞若) 宿屋(良齋) 講七(鶴峰) 以下二十三名。大切、忠九。此の外に東京五聲會々員の出演。帶屋(旭) 合邦(松樂) 菅四(三芳) 新口(聲風)

京城

若水明

▽全鮮素義聯合會主催の第四回同會△

當地素義聯合會主催の第四回同會は、七月七、八の兩日午後三時より開催、今回の審査員は石村かつら先生で、その審査員の採點を考慮に入れず、全然白紙で先生独自の採點は好評を博しました。

多數寄贈品が山と積まれ、その華やかさは近頃珍しいものでした。

その成績表を出席順に示せば次の通りであ

ります。

(第一日) 十種香(一一〇、佳美)忠四(九八、二引)酒屋(九九、呂竹)酒屋(一〇三)佳昇)菅四(九三、福彌)忠四(一一二、米司)本下(九八、キンケ)井子(九九、南北)中將姫(一一一、春京)酒屋(一〇五、吐月)

揚屋(一〇三、照京)紙治(一二四、新清月)阿漕(九九、鞍馬)引窓(一二八、華名目)赤垣(一四二、古雀)佐太村(一五二、喜登)

(第二回)安達三(一〇五、貴勢)忠四(一五〇、紫扇)太十(六五、東)忠四(九二、秀清)阿漕(八五、一風)鈴ヶ森(九九、美雀)合邦(九二、可祝)太十(一〇七、美名登)合邦(一〇〇、吟醉)太十(一三二、水音)阿漕(一三五、望月)忠四(一五一、登鶴)

優勝旗は遂に大村喜登翁に渡りました。が翁は流石に「義太夫の神様」といはれる程の藝毫である事を裏書きされたのです。

▽やよい會の放送△

當地義太夫藝妓連のやよい會では、太助菊三、綾之助、菊助、お吉の五美妓によつて、八月十三日正午の演藝放送に、京城放送局より「忠七」を送りました。

平右衛門(太助)おかる(菊三)由良之助(お吉)力彌(綾之助)絃(菊助)にて滅法な好評を得ました。

編輯後記

★：氣候不順で、まだ残りの暑さもございませぬが、なんといつても秋めいて参りました。今年の夏は如何にお過してゐらつしやいしまたか。

★：前號にて第二回東都素義名流大會開催の豫告を掲載致しました所、早速本社へ多數の御申込みがございましたので、私共の喜びは一とほでございませぬ。最早や開會も近づきました事とて、この際まだお申込み洩の諸家は奮つて御参加下さいますやう御願ひ申し上げます。

★：尙既にお申込み下さいました方々には、出演順抽籤を兼ねて、九月九日午後六時より並木俱樂部に於て、親睦茶話會を開催致しますから、改めて御通知申上げますが、何卒お出掛け下さいませやう。大會直前の一夕を愉快に過されん事を希望致します。

★：尙番組決定次第、直ちに印刷發送仕ります。

す故、何卒御期待下さいませやう。
★：それから來月號は吉例により、太棹全誌面を擧げて、名流大會記念號と致しますのでこれ亦御期待下さいませ。

★：本誌の表紙及び「文樂樂屋圖繪」を御執筆下さいませます漫畫家の鬼才宮尾しげを氏から、新しい美事な表紙繪が送られました。本社はこれによつて、又々美しく飾る事が出来るのを、筆者に對し厚く御禮申上げます。

★：尙、新表紙繪は、第七十號より掲載。本年一杯にて、新年號よりは年四回の豫定にて變更致したく存じますので、益々面白いものを御覽に入れる事と存じてをります。

★：今月は從來掲載されてありました二三のものも、次號大會記念號準備の爲休載致しましたが、それに代つて、淨瑠璃註釋本を今月號より連載致す事になりました。先づ第一回は最も普及されてをります「太十」で、これを逐次連載して、完結の暁は一冊の小冊子とし、お語りになる方々が、演奏會にて配付なされるやうな、洒落た寄贈品を作りたいと存じてをります。本社の第一回出版ができました折には、何卒右御利用下さいませやう。定價その他は未定でございませぬが、勿論、一切他への轉載は許しませんから、右お含みの上御愛讀の程願ひ申し上げます。

暑中御見舞狀を賜りました皆様は厚く御禮申上ます。
——芳河士——

後本
援誌
名譽
會員

(イロハ順)

(東京之部)
 堀藏吉安竹中平北和嘉松平吉岡廣高須
 田田藤内澤田島喜本野川崎瀨島賀
 と登くを平北春巴春ろ浪田い一
 とき都盛るる巴和斗和常子昇補六は廣鳳
 わ鳥氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

井正田大松竹紺飛大本小鈴木本神福保安
 上田口用尾内石和多林木馬田々藤
 大辰嘉武も我な可笑可笑和和里柳長都
 巽龍壽津市つ笑め笑笑笑舟樂熊芳蝶平昇
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

寶杉松水田是鈴加瀧國本中高高乃矢萩宮片乃金
 藏山岡戸中澤木藤脇井城野野村富原本山村井
 寺部廣悟兒福つま冠吳乃つ武ば素辰
 天語語廣園雀勝ばと之羽昇菊鞠靱ぼ藏め弘稻
 昇樂松壽笑園雀勝ばと之羽昇菊鞠靱ぼ藏め弘稻
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

三高小佐岩秋川菊井金細平木波寺大及松大島
 ツ瀨黑野田山奈地田田川井さ野三三三朝天
 美登利氏美玉昇成か氏銀司志泉鳳清榮え樂幸鳳旭章葵賞
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

吉田美地 句氏
 横井三由氏
 鈴木寶氏
 玉井樂氏
 菊地樂氏
 平井月氏
 山田秋氏
 秀藤松氏
 伊藤宏氏
 武笠亮氏
 高品重氏
 松岡雄氏
 白井清氏
 近江清氏
 湯原清氏
 (地方之部)
 米國平野一昇氏
 同武榮玉氏
 同杉山陶岳氏
 同武田德昇氏
 同兼廣廣玉氏

同西本西紫氏
 榊太宮下杉鳳氏
 足利福田都氏
 米國細田眞玉氏
 静岡村岡壽樂氏

社告

本社主催『身振劇入東都義太夫會』並に『淨曲振興會』は暑中八月だけは休ませていたゞきましたが、九月より左の通り開催致します、何卒賑々しく御出演賜りますやう願ひ上ます。

◆東都義太夫會 第六拾三回 (坂東勝治身振劇入)

淺草・松屋ホール——九月廿五・廿六日

◆淨曲振興會 第拾一回 (素 淨 瑠 璃)

日本橋・白木屋ホール——十月十四日

愛義會同人氏へ

今回「大東京素義聯盟審査會」に就て御投書に接しましたが、誌上發表は限名でも差支はありませんが、本社へ御氏名だけはお洩しをき願ます。匿名の爲め掲載はお預り。

定		價		廣告		特	
一部	金三十錢	一年分	金三圓	普通	一頁	一頁	一頁
六月分	金一圓八十錢	金三圓	圓	一頁	金貳拾圓	金貳拾圓	金貳拾圓
郵稅	共	郵稅	共	金參拾圓	金參拾圓	金參拾圓	金參拾圓

(行發回一月毎) 號 月 八

昭和十年八月廿九日印刷納本
 昭和十年八月卅一日發行

編輯兼 富取 壽鹿
 發行人 富取 壽鹿

東京市牛込區早稻田町五八
 印刷人 栗原 榮松

東京市牛込區早稻田町五八
 印刷所 栗原印刷所

東京市小石川區音羽二丁目四
 發行所 太 棹 社
 振替東京三一七八五番

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
 ▼誌代は總て前金御拂込の事
 ▼なる可く振替に御送金の事
 ▼郵券代用は一割増但二錢切手の事

祖元込吹ドーコレ易簡

★目下大流行のレコード吹込みに種々なる弊害ある事を遺憾とし今般私方では優秀なる電気吹込機械(チャンピオン式)と『レコード原盤』最新式を製作致しました。

一音 量 大會社の

一音 質 レコード

一使用度数 と同様です

一時 間 兩面凡九分迄の準備あり

一代金貳圓五拾錢

出張は五枚以下は別に壹圓頂戴致します。

機械による不完全なる吹込みに御不満の皆様方にも「私方のレコード吹込み」を御薦め申上げます。

會 商 央 中 作製械機込吹氣電
業 創 年 五 正 大

三ノ七ノ一町壽區草淺・祖元込吹

円 六

九段下の名物
電話九段二〇五一番

すつぽん椀なら江戸前蒲焼なら
御宴會は大勉強すべて安値に

關西料理

風流・金ぶら・茶漬

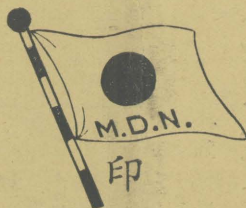
【美地旬】

去 月 屋

新橋二ノ八
電銀二〇八

東洋に於ける
斯界のパイロット!!

於各大博覽會
賜優良國產金盃賞牌多數



本木注射針

併號 本木大熊

醫療用齒療用
治療界の寵兒!!

製品種目

齒療用	醫療用
二十白 ツケル	英國最優銅製 引拔鋼化鐵製 不酸化鋼製 超不酸化鋼製

東京市瀧野川區中里四四七
本木注射針製作所
所主 本木梅治郎
電話水石川(85)二四三七番
出張所 東京市本郷春木町二ノ五
電話水石川(85)三四一〇番
研究所 千葉縣君津郡富岡村田川